

広島大学総合科学部報

# 飛翔

第83号



## 特集

総科のプログラムが  
なくなるってホント？

総科あるある&お悩み相談室

広島大学  
総合科学研究科・総合科学部  
広報・出版委員会  
飛翔編集委員会

Another Talk  
輝いている人紹介

## <目 次>

○巻頭言	2
○研究室紹介	4
○特集1 総科のプログラムがなくなるってホント？	15
○特集2 総科あるある&お悩み相談室	19
○OB・OG紹介	21
○特集3 Another Talk	27
○特集4 輝いている人紹介	31
○飛翔な日々	36
○マフルーカ・ザルイさんを偲んで	39
○編集後記	40

## 巻頭言

### 総合科学部の「歴史力」



水羽 信男  
総合科学研究科  
研究科長補佐

僕が広島大学文学部に入学したのは、一九七八年。専門はアジアを対象とする歴史学研究で、広島文理科大の設立から数えれば、五〇期生となる。入学早々、運動音痴であるにもかかわらず、僕は体育会硬式庭球部に入ってしまったのだが、そこで出会った教育学部の友人は、総合科

学部は猛烈な対抗心を持っており、「総科生は英語ができ、就職率も高いが、学問的には深みに欠けるよね」と揶揄していた。とはいえ、世事に疎い僕は、その総科評が当たっているのか、理解できなかった。

テニス部を途中で辞め、大学院進学を考え始めるきっかけとなったのが、一九八〇年三月に総合科学部の小林文夫先生が組織した広島大学学生訪中団への参加だった。この旅行団は北京・上海・南京・西安を訪れ、得難い経験をさせてもらったが、その運営は、小林門下の大学院生たちが担っていた。その後、彼らに誘われるままに、総科の院生・学部生たちを中心とする英書の輪読会に、文学部の友人とともに参加することになった。

読書会の運営の中心は総科の二期生・三期生で、彼らは「総合科学」の理想に燃えていた。いまでも覚えているのは、彼らが文学部のアジア

史研究を厳しく批判していたことだ。曰く「文学部の死んだ文献史学では、本当の生きたアジアを理解することはできない」。

こうした物言いは、総科を設立した今堀誠二先生の、あるいは小林先生の受け売りの部分もあったろう。しかし、彼らは間違いなく文学部流の「古い文献史学」を批判する立場を自分のものとしていた。読書会以外の「飲み会」の場で、我々文学部の学生は、いかに自分たちが至らないかを指弾されることになった。

そのなかに文学部生は論文のストーリーを追うのは得意だが、論文のテーマを理解することが苦手だ、という指摘があった。論文を読むうえで大切なのは、何が書いてあるかをまとめることではなく、まず著者が何のためにその論文を書いたのかを知り、論文の主題を批判的に検討することだ、という意味だった。

こうした環境のなかで、僕は総科

の大学院と文学研究科、どちらを選ぶべきなのか、悩むことになった。一度は総科の魅力の虜になったのだ。だが最終的には「古い歴史学」を選んだ僕は、総科との関わりも薄くなった。今その理由を詳述する余裕はないが、偶然の産物というべき面もあつたように記憶している。

そんな僕が縁あつて総科に赴任したのは、一九九六年の一〇月だった。そのとき総科の先輩教員からいただいたアドバイスは、「文学部から総科に異動するということは、寿司職人を目指し、伝統的な技を精一杯磨いて店を開いたら、お客さんから蜂蜜をかけた握り寿司が欲しい、と言われるような経験をすることだよ」というものだった。自分が身につけた学問を、総科生が求めているわけではない、ということだった。そのアドバイスのおかげで、二〇年近い総科生活のなかで、教員として嫌な思いをしたことはない。僕の

研究が総合科学の名に相応しいものかどうかは忸怩たるものがあるが、それでも歴史学を基礎に、政治哲学や文学などを組み込んだ学際的な地域研究を目指してきた。なによりも地域研究とは問題解決型の研究方法であり、今日的な課題を常に意識して研究に取り組むようにしてきた。

今、総科と僕の関わりを思い返したとき、最近の学生のなかには、大でやるべきことが決まらないから、「とりあえず」総合科学部という人も増えてきたように感じる。総科というユニークな場所を、積極的に活用するというよりも、まずは決めないで済む場々責任をとらずにすむ場として、総科を消極的に選択するケースといえようか。

とはいえ、こうした消極的な印象を述べるのは、僕が年を取ってみなさんとの距離が広がってきたからかも知れない。自信をもって「蜂蜜かけ寿司」を注文する学生を含め、今

でも熱心で優秀な学生と出会い、総科生のすごさを感じ、教えられることも少くないからである。我々の側が精神的な若さを保つことこそ、重要なかも知れない。

いずれにしても、みなさんにはぜひとも総合科学部の歴史を、自らひもといて欲しい。さしあたり総科創立三〇周年を記念して出版された叢書「インテグラール」の最初の一冊、『シンポジウム・ライブ 総合科学!』丸善出版、二〇〇五年などが参考になるだろう。因みにこの叢書は、今まで一〇冊刊行されている。

私たちの学部には、日本の学問をかえるのだという先輩たちの理想と失敗、そして、それでも夢を追うアグレッシブな歴史が刻まれている。僕たちはそれ追体験することで、自分たちの持っている可能性の大きさに、確信が持てるのではなからうか。